



井上峰雪（ほうせつ）

略歴

日展会友
読売書法展理事
日本書芸院評議員
宮日美展無鑑査

ごあいさつ

温故知新、求めて止まぬ幽玄の書の道。
三十年前、私は「昇峰由源」の道を歩き始めました。高い峰に昇るには、源から一歩ずつ歩むことから始まった、遼遠なる旅路の途中です。しばし立ち止まり、来し方の足跡を顧みると同時に、ゆとりある生活の中に、書のある空間をと願い、そして書文化の楽しさを、身近に感じ取って戴けたらとの思いと、今在る場所で精一杯に咲いている、名前も知らない野の花一輪、まるで自分の様との思いを作品に重ねて、「書の散歩道・嘉会」と題し、此の度、東京・銀座画廊にて、個展を開催する運びとなりました。
皆様のご来場を、心からお待ち申し上げております。
よろしく、ご高覧、ご指導賜りますよう、ご案内申し上げます。

平成二十五年十月吉日

井上峰雪



尾崎邑鵬 先生

略歴

日展参事
読売書法会顧問
日本書芸院名誉顧問
由源社主宰

峰雪女史の個展に寄せて

この度、井上峰雪女史から、銀座で個展をやりたいたいが…と、相談を受けた。大賛成である。女史は書においては、昭和五十八年、大東文化大全国書展（青山杉雨審査委員長）で第一席、文部大臣賞を受賞、以後二年続けて上位入賞して、俄然注目され始め、平成七年に日展初入選、現在は会友として活躍、読売書法展では既に審査員に就任し、研鑽を日夜怠らない。地元宮崎に於いても、宮日新聞社主催の書展等で活躍の場をひろげ、それなりの評価を得ているようだ。

峰雪女史の書は、剛健、博大、昇龍の気概のあるものが多い。然も、時には繊細でもある。用筆もさることながら、墨の使い方が巧みな一点も見逃せない。それに、雅仙紙以外の着色紙を使用する事も大胆である。この度の個展でも、着色紙を多用しているようである。女史の進取の気象は、多くの研究者が見習うべきものがある。
この峰雪個展が願わくば、後に続く由源諸氏の嚆矢となって欲しいものであり、色々の意を含めて、盛大裡に終了することを願ひ、ご来会の諸先生、諸先輩方のご批正を深くお願いする次第です。

尾崎邑鵬

特別賛助出品

尾崎邑鵬 先生



「夔を憐む」

峰雪



「生きることは一筋がよし寒椿」



峰雪

作品の案内

- 大作（3×8尺） 7点
- 屏風（6曲） 2点
- 小作品（全紙1/2以下） 65点余